

中国学习者 日语被动句误用 研究

(中国人学習者の日本語
受身文の誤用研究)

An Analysis of the Misuse
of Passive Sentences
by Chinese Japanese
Learners

史兆红 / 著

中国学习者日语被动句误用研究

(中国人学習者の日本語受身文の誤用研究)

An Analysis of the Misuse of Passive Sentences
by Chinese Japanese Learners

史兆红◎著

 世界出版 出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

中国学习者日语被动句误用研究 / 史兆红著. —北京: 世界知识出版社, 2018.10

ISBN 978-7-5012-5868-0

I. ①中… II. ①史… III. ①日语—教学研究 IV. H369.3

中国版本图书馆CIP数据核字 (2018) 第234958号

责任编辑 袁路明
责任出版 赵 玥
责任校对 马莉娜
封面设计 小 月

书 名

中国学习者日语被动句误用研究

Zhongguo Xuexizhe Riyu Beidongju Wuyong Yanjiu

作 者

史兆红 著

出版发行

世界知识出版社

地址邮编

北京市东城区干面胡同51号 (100010)

网 址

www.ishizhi.cn

电 话

010-65265923 (发行) 010-85119023 (邮购)

经 销

新华书店

印 刷

北京虎彩文化传播有限公司

开本印张

787×1092毫米 1/16 34印张

字 数

670千字

版次印次

2019年1月第一版 2019年1月第一次印刷

标准书号

ISBN 978-7-5012-5868-0

定 价

86.00元

版权所有 侵权必究

本书获中央高校基本科研业务费
专项资金资助

前言

任何语言在其使用过程中都存在语言的错误问题,学习语言必然会出现语言误用。无论是第一语言还是第二语言,母语还是外语,也无论是儿童还是成人,在语言使用过程中都存在语言误用的问题。因此,人们很早就对误用给予了关注和研究,如1929年出版了亨利·弗雷(Henri Frei)著法文版《语法偏误》(*La grammaire des fautes*),日本于1934年由小林英夫翻译为日文《誤用の文法:機能言語學的研究》。不过,最初的误用研究主要针对母语者对母语的误用问题。外语的学习过程虽然不同于母语习得,但它仍然是一个不断修正语言错误[包括偏误(error)和失误(mistake)],以期最大限度接近目的语的语言修复和构建过程。20世纪40、50年代,随着西方语言学研究的发展及其理论不断推进,同时也推动了语言教育的发展,尤其在外语教育方面的贡献卓越。随着二语习得理论,特别是中介语研究理论的建立,误用研究从内容和方法上不断取得进步,误用研究的意义和价值也在沉浮中不断得到新的认识。20世纪80年代中期以来,误用研究在二语习得研究领域以及外语教育领域已经受到普遍关注。误用研究、中介语研究成为当今研究的热门课题。误用研究的价值不仅在于探究学习者的语言学习系统,而且对探究目的语的语言系统、母语的語言系统等语言研究方面也有着重要的启示意义。同时,误用研究的成果有助于推动外语教学和研究,具有其实际操作意义和指导实践的理论价值。另外,对误用成因的考察可以延伸至中日语言文化的比较研究。

虽然误用研究的理论在不断创新,然而由于外语学习本身蕴含着学习者的语言和文化因素,心理因素,社会环境因素等错综复杂的影响变量,加之每种外语相对于每种母语呈现出的多样性和特殊性,各种细节和细化的研究成果也比较多,但是外语习得机制、外语学习的整体机制至今尚不十分明确。而且,正如母语者同样存在误用问题一样,外语学习者的语言误用问题也会一直存在,虽然两者之间存在着本质的差别。误用研究的目的即是试图缩短或消除这一差异,明确不同语言文化间的异同,避免误用的出现,促进掌握外语的进程。

在二语习得研究中,学习者在语言学习过程中的误用问题一直是关注的重点。随着语言学、应用语言学、认知心理学以及其他相关学科的发展,人们对二语习得中误用的态度也发生着一定的变化,形成了对比分析理论、误用分析理论、中介语理论等一系列分析误用的理论和方法。二语习得包括对第二语言的习得和学习两个含义。语言习得强调自然状态下的语言掌握过程,外语教学中的二语习得研究一般指外语学习者对外语的有意识的学习过程。另外,外语学习者的误用范围一般涵盖以下三个层面:对学习者外语使用过程中出现的违反目的语规则的语法结构层面的错误。偏离文化认知等的语义结构层面的错误。语言使用不恰当,或违背社会常规习惯的语用层面的错误。

误用研究不应该只是单纯的语言对比、语言内部的比较研究,应该在此基础上进一步发掘包括语言在内的两种语言文化中存在的差异,以及产生其差异的根源。误用研究首先应从语言内部结构以及语言使用状况中理清误用的现状,把握误用发生的特点,综合考察误用的诱发原因,然后,针对误用问题提出解决对策。这是非常重要也是基础性的研究,是迄今为止误用研究的主要方法,也是本研究的主要思考方法和结构脉络。

语法层面的误用研究对外语语言研究及语言教育意义重大,但是误用研究不仅限于语法层面的误用,当然从语用角度出发的误用研究从20世纪80年代逐步开展起来,但是仍然没有得到广泛关注,其研究范围和深度需要进一步拓展。另外,误用研究的成因分析研究还存在很大的发展空间,现在一般认为误用主要由于母语影响、语言使用策略,或训练失误等导致,对误用深层成因因素的研究,如从文化认知角度开展的研究还很有限。现阶段的误用研究应该进一步向语言文化研究的新阶段发展和推进。

众所周知,语言学起始于西方语言学的研究,比较语言学是对同族语的比较,是从同源的不同语言中试图找出其相同的部分,以期实现追溯语言的宗源以及探寻语言发展的多样化的目的。而汉语与日语虽同属东方语言,但语族不同,二者的对比研究不同于语言比较研究,也不只限于语法的对比分析,而更多的应该是基于语言表象下对文化间差异的比较研究。其目的是为了更好地了解各自不同的语言结构和文化结构。而且,不可否认的是,完全依赖和套用西方语言学概念和理论来研究东方的文化和语言可能存在一定的危险性。那么,语言的误用研究也是同理,应该注意到迄今为止的误用研究主要基于源于西方语言系统下的同族语误用研究理论,在探讨中日语言误用问题时,不可避免地存在局限性。我们应该在借鉴传统误用理论的同时,把误用研究视野置于两种不同文化的对比研究之中,扩展误用研究的关注范围和涉及因素。

本研究把二语习得(日语学习)理论中中介语的误用部分作为研究对象,以从

大型日语学习者作文语料库《YUK 加注标签的中国母语日语学习者作文语料库》(Ver.3.)中抽取的日语被动误用句作为数据研究基础,对中国学习者的日语被动误用句的误用状况进行了调查。研究目的为通过对比分析和误用分析探明中国学习者日语被动句学习的问题所在。研究的意义为通过分析误用成因探究中国国内日语被动句的误用状况,最终构建用于日语教育实践的理论框架。

本研究的结构为序论、本论(三个部分)、结论,共五大部分。序论部分,首先分析误用、误用研究等概念以及论述研究理论和先行研究。其次,论述日语被动句的误用先行研究及其存在的问题。最后,介绍本研究的研究内容、研究对象、研究方法等,并在此基础上阐述本研究误用调查所用的四种误用分类法。本论部分,分别从日语被动助动词的误用分析、日语被动动词的使用分析、日语被动结构的误用分析等三个方面进行了误用分布状况调查,并结合对不同学习年限日语学习者的调查和综合调查,对其误用状况和成因进行了分析。结论部分,先对调查分析做了整体概括,然后作为解决误用的对策,针对以中国学习者对象的日语被动句的教学,在对日语被动句分类方法提出新思路的基础上,在学习难点、学习顺序、学习指导等方面进行了分析和探讨。

由于本人才疏学浅,研究水平有限,在此恳请各界学术同仁不吝指导和赐教,将不胜感激。让我们为提高中国的日语教学水平不断切磋思考,为开创适合中国学习者的日语教学而共同努力奋斗。

作者

2018年8月 立秋日于北京

目 录

前 言	1
1. 序 論	1
1.1. 誤用について	2
1.1.1. 誤用の概念	2
1.1.2. 誤用と関係する概念	8
1.2. 誤用の研究について	12
1.2.1. 誤用の研究理論	12
1.2.2. 誤用の研究方法	20
1.2.3. 誤用の研究対象	24
1.2.4. 誤用のレベル	26
1.2.5. 日本語の誤用に関する先行研究	28
1.3. 日本語受身文の誤用研究について	30
1.3.1. 日本語受身文の誤用を研究する理由	30
1.3.2. 日本語の[受身文]と中国語の[被動文]に関する研究	36
1.3.3. 日本語受身文の誤用に関する先行研究	44
1.4. 本研究について	52
1.4.1. 本研究の調査内容	52
1.4.2. 本研究の誤用調査用分類法	57

2. 受身助動詞の誤用による日本語受身文の誤用研究.....	74
2.1. 日本語受身誤用文の分布	74
2.2. 日本語受身誤用文の型の分布	78
2.2.1. 日本語受身誤用文における受身型の分布状況	78
2.2.2. 型分類法による学習歴別の日本語受身誤用文の分布状況	81
2.2.3. 受身文の型による日本語受身誤用文の分布状況	102
2.3. 外部構造を持つ日本語受身文の誤用類型.....	113
2.3.1. 外部構造を持つ日本語受身文の主要類型.....	113
2.3.2. 外部構造を持つ日本語受身誤用文の誤用類型	118
2.4. 日本語受身誤用文における受身助動詞の誤用分析.....	142
2.4.1. 中日受身文の視点の相違	144
2.4.2. 中日受身文における主語と動作主の制限.....	146
2.5. 受身助動詞の誤用による日本語受身文の誤用実態.....	151
2.5.1. 中日受身文の型の対応関係	151
2.5.2. 型による日本語受身誤用文の誤用調査結果	178
2.5.3. 型による日本語受身誤用文の誤用分析.....	182
3. 受身動詞の使用による日本語受身文の誤用研究.....	201
3.1. 受身動詞の使用による日本語受身誤用文の分布状況.....	201
3.1.1. 受身動詞の使用による日本語受身誤用文の誤用調査	201
3.1.2. 学習歴別の日本語受身誤用形態の分布順序	205
3.1.3. [欠用+贅用]と[非用+謬用]の学習歴別の分布順序	206
3.2. 日本語受身文における動詞の分類.....	210
3.3. 日本語受身誤用文における学習歴別の動詞の使用状況	214
3.3.1. 日本語学習歴が1年未満の場合	216
3.3.2. 日本語学習歴が2年未満の場合	224
3.3.3. 日本語学習歴が3年未満の場合	239
3.3.4. 日本語学習歴が4年未満の場合	258
3.3.5. 日本語学習歴が6年未満の場合	278
3.3.6. 日本語学習歴が6年以上の場合	296

3.3.7. 日本語学習歴が7年以上の場合	317
3.4. 日本語受身誤用文における動詞の統計	325
3.4.1. 欠用にある動詞	325
3.4.2. 非用にある誤用動詞	328
3.4.3. 贅用にある動詞	329
3.4.4. 謬用にある誤用動詞	330
3.5. 日本語受身誤用文における動詞の誤用分析	331
3.5.1. 日本語受身誤用文における自動詞の誤用	332
3.5.2. 日本語受身誤用文における他動詞の誤用	351
4. 受身構造に関する日本語受身文の誤用研究	359
4.1. 受身構造に関する日本語受身文の誤用形態の分布状況	359
4.2. 学習歴別の日本語受身文の誤用形態の分布状況	361
4.2.1. 日本語学習歴が1年未満の場合	361
4.2.2. 日本語学習歴が2年未満の場合	363
4.2.3. 日本語学習歴が3年未満の場合	365
4.2.4. 日本語学習歴が4年未満の場合	367
4.2.5. 日本語学習歴が6年未満の場合	369
4.2.6. 日本語学習歴が6年以上の場合	371
4.2.7. 日本語学習歴が7年以上の場合	373
4.3. 全学習段階における日本語受身文の誤用形態の分布状況	375
4.3.1. 「 $v+O$ 」と「 $v+O+\alpha$ 」の分布状況	375
4.3.2. 「 $x+O$ 」と「 $x+O+\alpha$ 」の分布状況	376
4.3.3. 「 $v+\bullet$ 」と「 $v+\bullet+\alpha$ 」の分布状況	377
4.3.4. 「 $x+\bullet$ 」と「 $x+\bullet+\alpha$ 」の分布状況	377
4.4. 日本語受身構造の誤用における α の誤用形態	378
4.4.1. 「 $v+O+\alpha$ 」における「 α 」	379
4.4.2. 「 $x+O+\alpha$ 」における「 α 」	381
4.4.3. 「 $v+\bullet+\alpha$ 」における「 α 」	383
4.4.4. 「 $x+\bullet+\alpha$ 」における「 α 」	384

4.5. 受身構造に関する日本語受身文の誤用分析.....	386
4.5.1. 日本語の受身構造と直接にかかわる誤用.....	387
4.5.2. 日本語の受身構造の周辺にある誤用.....	433
4.5.3. その他の誤用の分布状況.....	449
5. 結 論.....	452
5.1. 中国人学習者の日本語受身文の誤用実態.....	452
5.1.1. 受身助動詞の誤用による日本語受身文の誤用実態.....	452
5.1.2. 受身動詞の使用による日本語受身文の誤用実態.....	458
5.1.3. 受身構造の誤用による日本語受身文の誤用実態.....	461
5.2. 中国人学習者の日本語受身文の誤用要素.....	467
5.2.1. 中日受身文の意味的な相違.....	467
5.2.2. 主語と動作主の制限.....	468
5.2.3. 中日受身文における動詞の制限.....	470
5.2.4. 中日受身表現の相違.....	470
5.3. 中国人学習者を対象とする日本語受身文の教育.....	471
5.3.1. 学習者主体の日本語教育.....	471
5.3.2. 中国人学習者の学習困難点による日本語受身文の分類.....	473
5.3.3. 日本語受身文の学習指導.....	484
5.4. 今後の研究課題.....	497
参考文献.....	500
后 记.....	526

1.

序 論

第二言語習得には第二言語の習得と学習という二つの意味が含まれる。言語習得は無意識的な言語習得過程が強調されるが、外国語教育における第二言語習得研究は一般的に外国語学習者の外国語への意識的な学習過程を指す。また、外国語学習者による誤用の範囲は一般的に学習者の目標言語の規則違反による言語構造レベルの誤用、文化認知などを逸脱した語彙レベルの誤用、不適切な言語使用、または社会常識や慣習に背いた語用レベルの誤用、という三つのレベルの誤用を含む。

言語研究は欧米から始まった。欧米言語研究の発展と言語研究理論の推進によって、1940～50年代から言語教育、とりわけ外国語教育はその発展が次第に押し進められた。第二言語習得理論の枠組で、誤用研究に対して、対照分析、誤用分析、及び中間言語分析などの方法と理論が相次いで現れてきた。誤用研究もその内容や方法において絶えず進歩を遂げ、誤用研究の意義と価値も誤用に対する新たな認識によって変わりつつある。1980年代半ばごろから、誤用研究は第二言語習得の分野及び外国語教育の領域において広く注目を浴びるようになった。とりわけ誤用研究、中間言語分析などは依然として今日の外国語教育と外語語研究、第二言語習得研究の注目される課題である。

言語は文化を内包し、文化の現れである。また、言語は文化の一部として、始終文化からその影響を受けている。言語と文化はこのような密接な関係を持ち、更に互いに影響を受け合いながら、一体となっていることは自明なことであろう。この意味においては言語学習は言葉の勉強であると同時に、また当該文化の学習でもあると言えよう。とりわけ、第二言語としての外国語学習になると、外国語の文法学習だけでなく、対象国の文化を学習する過程でもあると言えるのではないか。したがって、外国語学習の過程における誤用を考える場

合、文法体系上の誤用、及び言葉を媒介してコミュニケーションをする際に起こる語用誤用という問題は、言語文化の問題として、文法誤用とともに重要視しなければならない。しかも、言語の構造は言語話者の考え方・文化を反映しているとも言えることから、言語形式としての文法も文化の現れであると言える。そのため、両者を切り分けて別々に考えるのではなく、文法誤用も語用誤用も自文化と異文化が接触する際に発生する問題として文化という視野に入れて考える必要があると考えられる。

外国語の学習過程は学習者の学習した言語知識をはじめとする外国文化のインプットとアウトプットの過程である。また、外国語学習者の言語輸出の過程において、必然的に口違いや書き違い、言い誤りや書き誤りなどの言語ミステークやエラーが頻出する。しかし、これらの誤りの形式や性質、その誤りの出る段階によって誤用であるかが違ってくる。また、そのアウトプットの効果もコミュニケーションの目的達成度によって、誤用かどうか違ってくる。しかし、いずれの誤りにしてもその探求価値が十分あることは疑わない。もちろん、日常の学習過程においてこのような誤りへの即時分析及び随時訂正は大切で欠かせない作業だが、これらの作業は誤用研究とは同質のものではない。したがって、誤用研究をする場合、まずどのような誤りが誤用研究の範疇内なのか、また、どのように誤用を判定するかなどを考えなければならない。よって、序論では、前半はまず誤用研究の概念及び誤用と関連するいくつかの概念を明確にしたい。また、誤用分析の研究対象、理論や、誤用研究の方法やレベル区分などについて論ずる。後半は日本語受身文の誤用研究について概観する。また、本研究の調査内容と方法及び調査用の誤用分類法を述べる。

1.1. 誤用について

1.1.1. 誤用の概念

1.1.1.1. 誤用の定義

「誤用」を『広辞苑』（第五版、岩波書店）では「あやまって用いること。用法をあやまること」と解釈し、『学研国語大辞典』^①では「方法をまちがって使うこと。また、誤った使い方」と、『国語大辞典』^②では「用法をあやまること。本来の用法と違った用い方をすること。」と解釈している。つまり、一般的な概

① 金田一春彦・池田弥三郎 (1978) 『学研国語大辞典』, 716, 学習研究社, 昭和53年4月1日。

② 尚学図書 (1981) 『国語大辞典』, 984, 小学館, 昭和56年12月10日。

念として、方法や用法を誤まること或いは間違っていることやそのような使い方のことが「誤用」と認識されているのである。

言語学上では、「エラー」(error、=誤用)^①という言葉がはじめて用いられたのはCorder(1967)の論文“The Significance of Learner’s Errors”^②である。「エラー」は言語規則を違反した言語エラーあるいは言語使用エラーのこととされているのである。また、誤用は一般的に広義的誤用と狭義的誤用に分けられる^③。広義的誤用は第一言語(First Language)としての母語話者の誤用で、母語話者の母語エラーと外国語エラーの両方を指す。これに対して、狭義的誤用は第二言語(Second Language)としての言語学習者が目標言語を使用するときに犯すエラーのみを指す。第二言語というのは第一言語を習得した後に学習したあるいは用いた母語以外の言葉である。本研究においては主に第二言語習得^④中の誤用を指す。第二言語習得が独立した学科として始まったのもCorder(1967)の論文“The Significance of Learner’s Errors”である。第二言語習得理論における「誤用」の定義はCorderの「エラー」に対する考えを手本としている。つまり、誤用は目標言語を基準とする第二言語学習者の目標言語からの無意識的なずれであり、そこから発生した言葉のエラーや言葉の不完全さである。このようなエラーはシステムの、規則性があることから、言語使用者の言語運用能力を反映し、言語能力の範疇内のものとされている。

魯^⑤(1992)は「誤用分析と外国人向け中国語教育」^⑥という論文で「誤用」を次のように定義している。「外国語学習者が外国語を用いてコミュニケーションをする際、全体的に言えば、その使用言語の形式と学習した外国語の基準の間に必ずある程度の差がある。これは正字法、音声、文法、語彙、テキスト、語用など言語の各レベルに現れている。これらの差を「エラー」(誤用)という。

① 表記の統一を図るため、Corder(1967)の論文内容やその中の概念を述べる時に「エラー」を使うが、その他の場合は、「エラー」の訳語「誤用」を使う。本論文では「誤用」と「エラー」を同じものとする。

② Corder, S. P. (1967). The significance of Learners’ errors. *International Review of Applied Linguistics*(5), 161-170.

③ 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエーネットワーク。

④ 外国(中国)における外国語(日本語)の習得状況を考察するのが本研究の特徴なので、特別な説明がなければ、本研究における第二言語習得あるいは外国語の習得は外国語の学習を指すこととする。

⑤ 魯健驥は「中介语理论与外国人学习汉语的语音偏误分析(中間言語理論及び外国人中国語学習者の音声誤用分析)」(『语言教学与研究』1984年第3期)を発表した。この論文で、魯健驥は中間言語理論を用いて中国語学習者留学生における誤用分析を中国で初めて提唱した。「誤用」は中間言語と目標言語規則間の格差であることを指摘した。この理論のもとで、外国人中国語学習者が中国語学習に見られた音声の誤用や、語彙及び文法などの面における誤用分析をしたのである。

⑥ 魯健驥(1992)「偏误分析与对外汉语教学」『语言文字应用』第1期。

誤用は普段のミステークとは違う。ミステークは言い違いのようなもので偶発的で、規則性が薄く、母語話者にもよくある現象であるが、誤用は外国語学習者だけにある多発的で規則性のあるものである。外国語学習者が繰り返しその誤用を訂正してはじめてその外国語が目標言語に近づけるのである^①。

1.1.1.2. 誤用と中間言語

1950～60年代、チョムスキー (Chomsky) が行動主義という枠組下における言語学習法に異議を提示し、言語習得の過程を目標言語規則やシステムを発見する心理言語的過程と見なし、「言語能力」(competence)と「言語運用」(performance)という概念を提唱した^②。また、言語能力こそが科学的対象になり得るとし、母語話者でも言い淀みや言い誤り、ミステークなどを犯さない文法知識のみが研究の対象にできると考えたのである。これに対し、Hymes(1972)^③は、文法的に正しい文を形成する能力だけでは足りないと考えている。つまり、いつ、どこで、誰に対してどんな言葉を使ったらいいかということだけではなく、社会文化的なコンテストの中で言語を適切に使用する能力＝伝達能力 (communicative competence) こそが重要であることを指摘した^④。

Corder(1967)は“The Significance of Learner’s Errors”で、学習者言語のエラーの重要性に着目し、誤用が言語教育において積極的な役割を果たしていることを指摘した。それは以下の3点にまとめられる、(1)学習者の目標言語の習得程度と学習レベルが把握できる、(2)学習者の目標言語学習における学習ストラテジーと学習順序が把握できる、(3)学習者が作った目標言語規則仮設の正確性が学習者自ら検証できる。このようなプラスの面が考えられることから、誤用研究は学習者がどのように学習しているか、どこまで学習内容を身につけたかにおいては積極的な意義をもつと言えよう。しかし、誤用研究はその分類方法及び解釈方法が多様になるにつれ、統一的な基準がないまま、また誤用の問題を強調しすぎているなどといった問題が起きた。そのため、第二言語習得過程に表出した誤用に重視するだけでは足りないと考えられるようになった。例えば、誤用以外に存在している回避の問題などが把握できないため、「学習者言語の自律性」を強調する中間言語分析が重要視されてきた。

Selinker(1969)は「言語転移」(Language Transfer)を発表し、その論文で「中

① 魯健驥(1992)「偏誤分析と対外汉语教学」『语言文字应用』第1期。引用文は筆者訳。

② Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

③ Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics*, 269-293. Harmondsworth: Penguin.

④ 小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』, 15. スリーエーネットワーク。

間言語」(interlanguage、IL)という言葉をはじめて使った。1972年に、また「Interlanguage」を題とする論文を発表し、「中間言語」の概念を提唱した^①。中間言語とは第二言語の学習者が、その言語を学んでゆく過程で発生する、目標言語とは様々な点で違った体系を持つ学習者の特徴的な言語である。すべての言語において、その個別の学習者には中間言語が存在する。この中間言語は当然、学習者の習得レベル、学習内容、母語などからそれぞれ影響を受ける。つまり、中間言語は外国語学習の過程において、学習者が使う母語と目標言語の間に独立して存在している言語体系である。「中間言語」概念の出現は第二言語習得研究の始まりを示している。

第二言語習得理論では第二言語の習得は、第二言語に基づいて新しく形成された中間言語の言語行為と言語習慣を形成する過程であると考えられている。中間言語は学習者が構築した言語全体における縦的な動態描写であり、新たな言語行為と言語習慣の形成過程である。したがって、誤用分析は外国語学習者の言語習得効果という静的言語体系に注目するのに対して、中間言語研究は外国語学習者の学習過程に現れる新言語体系に注目していることが分かる。中間言語は学習の発展につれて目標言語に接近する動的な言語体系で、正用以外に、誤用の問題が必ず出てくる。故に、中間言語の研究範囲は誤用と正用を含むため、誤用分析の研究より範囲が広くなる。要するに、誤用と中間言語は包含関係であり、その研究範囲、研究対象、注目の焦点などにおいて内容が異なる。

1.1.1.3. エラーとミステーク

Corder(1967)は“The Significance of Learner’s Errors”で「エラー」(error)とミステーク(mistake)を区別している。Corderは外国語学習者にだけではなく、母語話者にも言い間違えたり書き間違えたりしてミステークを犯すこと、考えが途中で変わることによる話前後の不整合などの現象があると指摘している。これらは主に話者の考えの変更、不注意、緊張、疲労などによるもので、特殊状況下の一時的な現象である。ミステークは話者による訂正ができるため体系性がなく、話者の言語力を反映するものではない。無論、ミステークは意識的に直すことができる一時的なものであるため、長くは続かない。これに対し、エラーは学習者が自分が作った言語体系によって表した誤りで、正しい言語規則などから逸脱している部分である。このようなエラー(誤用)は学習者の意識的なアウトプットで、規則性や体系性があり、話者の言語能力を表している。

① Selinker L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-241.

誤用は外国語学習者が言語習得の過程に表出する必然的なものである。誤用は母語の影響による「言語間エラー（誤用）」(interlingual errors)と学習者言語体系(中間言語)内部に発生した「言語内エラー（誤用）」(intralingual errors)があるとされている。誤用は学習者が作り出した中間言語の一部分であるため、誤用研究は第二言語習得の規則性の発見及び第一言語の第二言語への認識増進に役立つものである。と同時に、実践の中で誤用を予測し回避することができる。外国語学習も第二言語習得の範疇内にある^①ため、外国語教育指導にも応用できる。これに対し、ミステークは偶発な原因などによるもので、言語内部の要素によるものではなく、外国語学習においては、特定の段階では研究する意義があるとは考えられるが、学習の最終結果である習得状態や学習運用力などについて考えると、その普遍性や典型性はあまりない。したがって、ミステークは研究分野によってその研究価値があり、第二言語習得研究においては研究対象とされる場合もあるが、本研究ではミステークを分析の対象としない。

それでは、ミステークとエラーをどのように選別するか。この点については二つの面から分析する。一つは、同学習段階の前後による即時的な学習レベルの比較、一つは学習全過程における段階的な比較から考えることができる。まず、学習者の学習レベルから誤用であるかどうかを判断する。学習者の誤用は主に不注意、忘れ、一時的な反復などによるもので、学習者の自己訂正が予測される。学習者の学習進度及び普段の言語理解や運用能力などの言語習熟度などから、学習者が自ら自分の誤用を修正する能力の有無を判断し、ミステークの場合はそれを分析の対象外とする。要するに学習者の学習状況の全体的な把握が必要である。次は、学習の段階性から誤用であるかどうかを判断する。Kellerman(1985)^②は言語発達のパターンは第二言語習得にも当てはまると考え、オランダ語を母語とする英語学習者の英語自他動詞“break”の習得過程を観察した。結果としては、17歳までは自他動詞としての用法を同時に使っている、18～20歳は自動詞の使用が減少した、20歳頃は自動詞の使用が再び増加すると報告している。言語の産出段階を三つに分けた。第一段階は目標言語の規

① 第二言語と外国語、習得と学習、それぞれの概念は違い、同じものではないが、外国語教育という視点で言う場合は、習得というより学習のほうが適切であろう。本論文では、外国語学習における誤用を扱っているため、後述における第二言語習得については、特に外国語学習を指すものである。つまり、第二言語習得と外国語学習を同一視する。

② Kellerman, E. (1985). If at first you do succeed. In S.Gass & C.Madden(Eds.), *Input in second language acquisition*, 345-355. Rowley, MA: Newbury House.